

日本画部門

審査員：竹内 浩一 先生

京都府出身 京都市右京区在住

1977年 第4回山種美術館賞展 大賞受賞
1979年 第11回日展 特選受賞
1991年 第4回京都美術文化賞 受賞
1996年 第9回MOA美術館 岡田茂吉大賞展 大賞受賞
2010年 京都市文化功労賞 受賞
現在 一般財団法人日本中国文化交流協会 常任委員
山種美術館 理事

<総評>

現代の日本画は混乱するほど多種多様の表現で溢れている。

彦根市美術展覧会の審査をさせていただき感じたのは、近江の山川草木に心馳せた作品が多くみられた。日本画は写生を大切にしてきた。上手く描くより対象の生命と一体になる哲学性を先人は示している。どの時も普遍の美の生れる意を知っておきたい。



■ 市展賞 ■

「登り窯」 松居 直子

登り窯はよく描かれるが、受賞作は常識にならず、作者が感動したときめきが見る者に伝わってくる。

画面のリズム感が生き生きしている。



■ 特選 ■ <京都新聞賞>
「風雅」 山田 政一

川辺の石垣に建つ木造の家を配した絵だが風雅な趣きがある。何んでもない一景だが作者の心馳せが密度のある心象の作品に仕上げている。



■ 特選 ■ <読売新聞大阪本社賞>
「みのり」 北村 登久

枇杷が描かれているが、実に感覚的で色具も単的にオレンジや黄。そして緑を大きなタッチの筆を置くように描かれ魅力がある。



■ 特選 ■ <KBS 京都賞>
「朝つゆ」 熊谷 滋美

小さな花をつけた草木を当りまえとせず、主観から幻想性をイメージにふくらませ、クモの糸を張りめぐらせ奥深い世界をクローズアップさせている。



■ 無鑑査奨励賞 ■
「休耕田にも春が」 深田 澄江

秋に刈った田圃が春を迎え土の匂いの中で新しい草が芽をふく。レンゲの二株につけたピンクの花が暖かく新鮮だ。

日本画部門

展示場所：第1・2研修室（メッセホール棟 2階）

展示No	賞	題 名	氏 名	備 考
1		蕪	藤野 和子	
2		袖 子 籠	長谷川 みよ	
3		春 う ら ら	澤 淑 子	
4		扉 の 向 う に は	日 永 清 重	
5		菊	馬 場 初 代	
6		蘭	大 村 千 代 子	
7		と う も ろ こ し	石 原 み ち 子	
8		親 子 鴨	小 澤 弘	
9	佳 作	黄 昏 れ て	今 居 桂 子	
10		か た ら い	堀 居 千 恵 子	
11		け や き の 歩 み	早 崎 清 美	
12		菖 蒲	平 松 越	
13		梅 雨	武 藤 愛 子	
14		枝 折	い と う け い ろ う	
15		薔 薇	杉 本 恵 美 子	
16		巖	竹 田 建 行	
17		春 待 つ 余 呉	北 岸 久 代	
18		高 知 で の 頂 き 物	長 崎 典 子	
19		桂	岡 村 康 臣	
20		「虫籠窓」のある家	青 山 宏 子	
21		薫 風	丸 山 リ ツ 子	
22		薔 薇	荒 居 年 子	
23		グ リ ー ン カ ー テ ン	滝 沢 千 代 子	
24	市 展 賞	登 り 窯	松 居 直 子	
25	佳 作	花 蔭	牧 野 昌 代	
26	特 選	風 雅	山 田 政 一	京 都 新 聞 賞
27		チ ュ ー リ ッ プ	曾 我 光 博	
28		石 垣	北 村 妙 子	
29		初 秋	澤 邊 雅 子	
30		春 の 残 り 大 根	松 本 喜 美	

展示No	賞	題 名	氏 名	備 考
31		自然のよろこび	北村 幸子	
32		晩 春	寺村 やゑ	
33		秋 輝	山 岡 勝	
34		庭 の 片 隅	成内 節子	
35		「 山 の 辺 」	高田 とみ子	
36		芙 蓉	小島 充子	
37		木 蓮	志摩 まゆみ	
38		山 あ じ さ い	高田 昭子	
39		冬 野 菜	竹内 歌子	
40	特 選	朝 つ ゆ	熊谷 滋美	K B S 京 都 賞
41	特 選	み の り	北村 登久	読売新聞大阪本社賞
42		時 の 流 れ	本 田 充	
43	無鑑査奨励賞	休 耕 田 に も 春 が	深田 澄江	無 鑑 査
44		サイカチのある芹川のけやき道	谷村 純子	無 鑑 査
45		春 待 ち 草	立江 恵美	無 鑑 査
46		栖 蘆	竹内 浩一	審 査 員
47		こ わ れ た 籠	寺村 晴雄	委 員
48		静 寂	眞野 康洸	委 員

